

## 90 終戦時残存した大和型の予備主砲身

大和型の46センチ砲は、建造が計画された4隻のために36門と予備の製造が予定されていたが、3番艦信濃は航空母艦へと改造され、4番艦は建造中止となったため製造は中止された。最終的に製造された大和型用の46センチ砲は、大和、武蔵のために18門が造られたほか、信濃用の砲身は7門が製造を終えていた。また発射試験用に2門が製造されて、呉海軍工廠付属の射撃場である亀ヶ首射撃場に保管されていた。結局、終戦時に残存していたのは9門であった。

終戦と同時に工廠では資料の焼却などが行なわれたが、砲身はそのまま残っていたために、米海軍対日技術調査団によって2門の砲身がアメリカに運ばれた。一門は完全な状態であったが、一門は閉鎖機のない砲身のみであった。残る7門は亀ヶ首において破壊されたのである。

米海軍は、上記のように2門の砲身をアメリカに運んだが、この他に数百発の91式徹甲弾と、数発の3式弾を運んだ。砲身は、ヴァージニア州のダールグレン海軍弾道試験場に搬入したが、特に技術的な試験を行なうことなくスクラップとされたといわれている。

本来技術調査を任務とする施設において、何らテストを行なうことなく貴重な資料である46センチ砲砲身を



仰角をかけた大和の46センチ砲。

スクラップにすることは、技術を重視しているアメリカとしては不可解なことではある。現実には発射試験が行なわれなかったことに関しては、砲身、砲弾は確保したものの、装薬（発射薬）を入手できなかったからかもしれない。また、大砲は砲身のみで発射できるものではなく、駐退機などを含め、兵器としての砲全体を整備しなければ安全な発射試験は行なえないので、こういった面から発射試験が実施されなかった可能性はある。

しかし、早期にスクラップとされたことに関しては、スクラップにしたのではなく、構造分析のために解体したと見ることも可能である。大和型の46センチ砲は、長門型までの主砲砲身とは全く異なった構造であり、これは昭和に入ってから開発された2A根幹式内筒換装砲と呼ばれ、ライフルを刻んだ最も内側の内筒が簡単に交換できる方式のものであった。これは、従来の大口径砲の内筒交換は、内筒を強引に叩き出し、新しい内筒を叩き込むような状態であったのである。大和型の46センチ砲では全体が160トンを超える砲身であるために、砲身の命数が尽きた際の、内筒交換の作業の困難さを考えると、内筒の交換を容易にする設計は無視できない機能であったといえる。46センチ砲に関しては、その口径の巨大さのみが評価される傾向があるが、実は、このような細部にわたって注意深い検討を経て設計製造されていたのである。戦後アメリカ海軍は、当然ながら40センチ以上の艦砲を製造する必要も計画もないために、46センチ砲そのものよりも、容易に内筒を交換できる砲身の構造自体に興味を持っていたのかもしれないと思うのである。

現在、米海軍がスクラップとした46センチ砲は、その一部がサンプルとして保存されているともいわれ、確認が望まれる。また、いうまでもなく、海底の大和、武蔵は、それぞれ9門の主砲を備えたまま眠っているのである。

### Q 90 終戦時に残っていた大和型の主砲身は何門？

- 1 1門      2 4門      3 6門      4 9門

## 91 アメリカに残る大和型の装甲板

戦艦大和の遺品ともいべき資料で、最も大きく、重要なものといえば、アメリカ、ワシントン郊外アナコスティア川添いのワシントン海軍工廠に展示されている主砲塔用の装甲板であろう。

この装甲板は終戦時に呉海軍工廠亀ヶ首射撃場から運び込んだもので、米海軍のダールグレン弾道試験場で、アメリカ海軍の戦艦の主砲である、50口径40.6センチ砲で打ち抜いた見事な貫通孔が空いている。

この装甲板は、大和クラス戦艦に使用が計画された26インチ、アーマー・プレートと説明されているが、説明にはどの部分の装甲とは書かれていない。これは、主砲塔の正面の鋼鉄で、正式には、「砲楯前板」と呼ばれたもので、大和型建造に当たり、新たに開発されたVH装甲板である。VH装甲板は装甲厚さに対する表面硬化層の深さを、従来の約4分の1から3分の1まで増加させたもので、さらに表面硬化は、従来の滲炭加工に抛らない特殊な製造法によっていた。本来装甲板は、敵弾を受け止めるために、表面は極めて硬く、同時に衝撃を吸収するために、背面は粘性の高い弾力のある鋼鉄で製造されるものなのである。この2つの相反する資質を、一枚の鋼鉄の中に持たせるために、多くの技術者の多年にわたる研究が行なわれていたのである。

大和型戦艦の主砲塔は、3連装であるために、楯は3本の砲身を挟むような形で4枚の装甲板が組み合わされているが、現存する部分は、形状から砲塔の肩の部分と思われる。さらに展示されている装甲には、アメリカ側でメモ的に書いたと思われる手書きのペンキ文字でPORTと書かれていることから、砲塔の左肩の部分であろうことが分かる。

さて、この装甲板にあいた40.6センチ砲の貫通孔を観察すると、正面から直角に命中した弾丸は、表面硬化層を破砕し、中部から背面にかけての部分の鋼鉄を、粘土のように粘った状態にして背後に突き抜けている。試験片に対しての貫通を目的とした射撃であるから、実戦でこのような貫通が起こることは考えられないが、見事な貫通孔である。また、この貫通断面を見ると、装甲板設計の意図が、これまた完全に表れていると見てよいであろう。

今日もなお、この大和型の装甲板がワシントン海軍工廠

に展示されているのは、世界最大の戦艦の装甲板を展示しているのではなく、世界最大の戦艦の装甲板を打ち破った米海軍の40.6センチ砲の能力を示すためと見るべきではあるが、いずれにせよ、貴重な歴史的、技術的資料である。

筆者は、かつてこの装甲板の写真を、大和設計主任であった牧野茂氏に差し上げたところ、「車椅子に乗ってでも、是非自分の目で見て確認したい」と語られた。特に、大きな面積の装甲板を造ることができなかったために、小さな小面積の装甲板をモザイクのように繋いだことを、苦しい設計であったとしみじみ述べられたが印象的であった。



ワシントン海軍工廠に展示されている主砲塔用の装甲板。

### Q 91 大和型の装甲板はこの国に保存されている？

- 1 アメリカ      2 イギリス      3 日本      4 中国